

音霊法

(友清、歎眞著の霊学筌蹄、天行林、神機鉤玄、磐門真語より抜粋し、一部現代的かな使用にしました)

音霊ほど世に奇しびなものは無い。

一切の心、一切の物の根元が電子よりも更らに玄のまた玄なる極微靈子(一霊四魂)であり、それが直ちに生命であり、それが直ちに音霊、数霊である。

宇宙が数霊で組織されているから宇宙の現象が数霊の雄走によって予知される如く、宇宙が音霊で経緯されるから宇宙の一切が音霊の雄走によって動かされるのである。

(中略)

河野至道仙人の「真誥」の中に、山中などで妖怪につけられた時、拍手をすると妖怪が逃去るといふようなことが書いてあるのも深い意味の存ることである。家庭の中には子供の笑声や唱歌の音が是非必要である。(中略)子供の居ない家庭では必ず主人が朝夕神拝の際にでも拍手して被いの祝詞でも奏上しなければならぬ。

音霊の雄走は神気の活動で、万物みな此の音霊の雄走によって感応しないものはない(中略)わが神典に於て最重要なる一節、天岩戸の段は音霊の威力を説明するものであり、神々の天地を揺がすばかりの笑声によって天岩戸は開かれたのである。

便宜上仏教の言葉を借りて説明すると、仏教はギリギリ結着の処つまりが、「五蘊の間を破する」にあると解して居ります。五蘊の妖雲を払いつくせば吾等は宇宙の第一義諦と格致するから何者にも束縛されない境地に立ちます(中略)

五蘊とは色、受、想、行、識の五つを言ひのべ、

色とは対象物のこと、

受とは感覚、感情のこと、

想とは観念とか概念とか言ひつよひなまもの、

行とは意思、判断のこと、

識とは理性のこと、智のことで最高の感情、

とにかく人間は此の五蘊を破すれば神人格合、宇宙第一義諦と帰着するのであるから至大無外、至小無内、三世十方通達しないことはなく知了しないこととはないと言ひつ境地に達するのである。

その一切から解放せられ、忽ち五蘊を破してする速疾第一の至極の妙術が此の音霊法である

宇宙の本体は無形であり無形であるから清浄極まるものである。清浄そのものが宇宙の本体である。一切のものの中で何が一番清浄かといふと音である。音は無形で音ほど清浄なものはない、故に音が直

ちに宇宙の第一義諦である。

音は即ち声であつてバイブルに「はじめにトトバありトトバは神と俱にあり」とも云い霊学筌蹄にも詳述しておいたやうに音は即ち霊そのものなのである。故に真に音に徹すれば宇宙の本体に徹するのである。

どんな人にも短時日の間に五蘊を脱却して宇宙第一義諦に通徹させることを実現するのが此の音霊法である。

(中略)

これを読んで直ちに軽卒に着手せられてはならぬ。

その方法が余りに簡易平凡で、俗な聴音催眠術などと紛わしいから、本書全巻を少くとも二三回は繰返して精読し、充分の覚悟が出来た上で、一気に錐をもみ込むように修行して貫はねばならぬ。従来多くの人々にやらせた経験によると始めの皮切りが最も大切であります。

この音霊法が、どういつとどういつがあるか

何故に此の音霊法が宇宙の第一義諦に通徹する最上速疾の法であるか、

音に徹すれば何故に一切界に徹するか、

心靈独立して第一義諦に徹すれば何故に自他の治病が出来、神通が得られるか

ということを繰返し精読して深く玩味し、得たところの信念を養い、然る後、錐をもみ込むような決心で一氣に着手せられれば第一回目から通徹して大歡喜を得られることを私が保証する。その信念を養うのに一週間や二週間で費しても決して損はない。

音霊法の実修方法

さて其の音観、わが音霊法の修行の方法は、一室に静かに坐し、静かに一定の音を聴くことです。

両手の置き処は、

男子は、先ず左手の拇指を軽く臍の穴にあて、他の四指を静かに自然のままに其の下部におく、則ち小指の尖は殆んど足のつけ根までに及びます。

右の掌を以て軽く静かに左手の上に重ね蔽います。右の手の拇指の尖端は左手の拇指と人差指との股にあたるやうになる。

掌にも腕にも肩にも其他身体の各部いづれにも少しも力を入れず自然のままに静にして居る。女子は右手と左手とを反対にして右の法に準じ行うものとす。

病気の都合等にては仰臥して行い時計を枕辺に置くも可。

たった其れだけのことであります。

時計といふ便利なものがあるから其のカチカチといふ音を聴きます。

雑念が起れば雑念も結構、雑念と一緒に時計の音を聴いて居ればよいのです。

時間は一回に三十分以上一時間にわたっても宜しく一日に二三回までは修しても差支ない。

そうして自分の病気を治す場合にも只右のようにして音を聴いて居りさえすれば宜しいので、自己の病気を治そうと思念する必要も何もなく、又た其の他の物事を思うもよし思わないのもよし無念夢想にならうなどと夢にも考える必要はない。

雑念起れば雑念も結構、雑念と一しよに時計の音を聴いて居ればよろしい。ただ音を聴くことだけを忘れぬよう、音を聴くことだけを心から離さぬやうにして居ればよろしい。

修法中に或いは身体が動揺したり或いは涙が出たりまたは汗などが出ることもあつても捨て置いて自然のままにまかせておけばよろしいのである。

また、一回または数回修行の結果、特別に悪臭ある糞便が出たり或いは大小便の量に異常の現象が起つても心にかける要なく、口ならずして平常に復するものである。

他人の病気を治せんとする場合には患者を静坐もしくは静臥させておいて患者に相對して行うので、患者にも閉目させて時計の音を聴かせぬ。

その心得も前以てよく話して聞かせておく方が宜しい、則ち患者と術者と相對して同様の形式をとるのである。この場合にも「患者の病気を治そう」「など思念の要はない、ただ時計の音を聴いて居るだけで宜しいのである。

いわゆる潜在意識の活動で普通意識を超越して働くのであるから「病気を治そう」など妄想が往来すると却て直霊の活動を妨げる、世の念力波動説などいふものと混同しては天地の差を生ずるのである。重症者或いは特殊の患者、又は頑でない小児等に対しては患者に知らせずとも術者のみで修して確實に奏効する。この場合は成るべく患者の睡眠時中を可とするのである。また代人に対して施術して奇効を挙げた実験が多い。(代人にも閉目させて時計の音を聴かせぬ)たとえば小児の病気の際における其母、良人の病気の際における其の夫人、親の病気の際における其の子、或いは相互の兄弟姉妹或いは主人の病気の際における主人思いの雇人、いづれも本人(患者)に知らせずとも又た距離は何百里距つて居ても差支ない。又た術者が一時に数人或いは十数人に対して行う場合も同じ道理である。あまりに簡易平凡な方法で余りに神験いやちこなるに誰れでも驚嘆せざるを得ないのである。

(中略)

幾多の難症固疾が此の音霊法の根気よき精修によつて全治したことは類例を挙げることの出来ぬほど無数にある。

また病気がない人も此れを平常修行して行けば、随時随所に修し得て日々夜々に三昧に入ることが出来るし次第に身心の調和がよくなって真の元気を作振し延命長寿を得るのである。

のみならず此れによつて霊眼を開き、被、小、細、遠を透視する能力を発揮したのも沢山にある。宇宙の第一義諦に合体するのであるから何でも如意自在はあたりまえのことで此の外に何の秘伝も

口訣もない。

三昧の真境に入れば妄想(五薩)が滅尽して居るから睡眠してつまらぬ夢をみたりするよりも却って身の疲労を正調に恢復するのである。

さあ茲に問題が起った。「この修法には妄想が起っても少しも差支ないと云ったではないか、それに今、妄想が滅尽して居るからとは一体どっちが本当のことか。

心の癖というものは何ういふものかと申すと、つまり反対に働きかけるものである。見るなどいふものは見たい、人に言つなと言われたことは言いたい、来てはならぬといふところは行きたい、飲ませぬといふと余計に飲みたくなる、思つなと云つと益々思つ、これが賢者も凡人も通常の間違のない心の癖である。

思つことがなければこしらえてでも思えと云うのが極秘のことなのである。

多数の人々によつて実地に経験したところによると「思え思え何でも思え、思つことが無ければこしらえてでも思え」でやつて行くと天の邪鬼心理学の法則によつてとうとう思いの材料が尽きてしまうものである。たいてい三四十分間もすれば尽きてしまうのである。少し手に入つてくると五分間位で第一義諦に徹するのである。

それを雑念を払え、無念無想になれという様な心持ちが少しでもあると雑念の材料は無尽蔵に出て来て何時間でも何日間でも幾ら思いつづけても思いの絶えることはないものである。

静かなところで修するに越したことはないが、車が通る、子供が泣き出す、少しも差支ない、それと一しよに時計の音を聴いて居る。病人などはこんきの弱いものでトモすれば時計の音を聴くことも途切れ途切に忘れるが、それでも宜しい、立派に奏効する、保証しておきます。

充分の信念を養われた上で実修して頂きたい。そして十二光を發して大歡喜を得て自他救済の實を挙げて貰いたい大誓願であります。

(中 略)

この「音霊」の効果は種々の方面に及びるのでありますが、先づ人間生活の上の誰でも直ぐ交渉をもつのは保健治病といふ方面に奇験があるからであります。こんな簡単な方法でどうしてそんな霊験があるかと怪まれるほどであります。しかも誰でも直ぐに実験してみることが容易に出来るのですから面白いのであります。しかも信仰の異同とか有無とかいふやうなことに関係がないのですから、どんな人にも直ぐ応用実修し得られるのであります。多年坐禅をやったり静坐法をやったり何々式、何々法といふやうなものをやつて、うまく行かなかつた人がうまく行くのですから不思議です。又そんなことをやらなかつた人たちも同様に直ぐうまく行くのですから面白いのです。

(中略)

静かに一定の音を聴いて気を鎮めるといふだけのことです。

(中略)

明治初年の神道霊学の大家、本田親徳先生の門人佐曾利清翁が時計の音を聴くといふ卑俗簡易の法をもつて、明治二十年代以後に於て幾千人といふ人々の病苦を實際に救い、更らにそれが縁となつて幾多の靈感能力者をさえ出すに至つたのであります。

(後略)

(注)

文中に「霊験・靈感」という言葉があり、実際に靈感を生じる人も居た訳ですが、この音霊法は冒頭にも記述してある通りいわゆる神法道術に類するものではなく、精心統一の二つの方法とされています。結果としてその種の効果も有るといふことです。

誰でも安心して実修できる方法です。

(注)

この音霊法で病気が治つたという話も沢山ありますが、だからと言って医者にかからずに音霊法のみに頼るといふ発想はしないで下さい。

医者にかかるべき病気が医者にかかり、その上で音霊法も行つ、という姿勢が好ましいと考えて居ります。